

「言語活動」を生かした生活科の授業：「気付き」の質を高める工夫についての考察

著者	杉能 道明
雑誌名	ノートルダム清心女子大学紀要．人間生活学・児童学・食品栄養学編
巻	37
号	1
ページ	41-49
発行年	2013
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000086/

「言語活動」を生かした生活科の授業 — 「気付き」の質を高める工夫についての考察 —

杉能 道明*

Class of Life Environment Studies which tries to “Language Activity”:
A Study of how try to make quality with “KIZUKI”

Michiaki SUGINO

23 years ago, Life Environment Studies was created. It has been 2 years since the elementary Course of study was mandatory. “Language Activity” is cited first on the list of “Main points for improvement about Education Contents” by the Central Council for Education. It stresses the importance of improving language activity through each Subject. It is demanded now that we make use of “Language Activity” in the Class of Life Environment Studies. The author has studied what kind of facilitation would be effective to make quality with “KIZUKI” in order to understand the importance of “Language Activity”.

Key words : Language Activity, KIZUKI, Key Competency

1. 「言語活動の充実」の方向性

平成 20 年 1 月 17 日に出された中央教育審議会答申では、「教育内容に関する主な改善事項」の筆頭に、「言語活動の充実」が挙げられ、各教科等を貫く重要な改善の視点であることが示された。

平成 23 年 10 月には、文部科学省から「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」が発行され、各教科等の指導事例が示された。

なぜ「言語活動の充実」なのか？この方向性が打ち出されることになった背景やねらいはどこにあるのだろうか？

2. 「言語活動の充実」の背景とねらい

(1) 「言語活動の充実」の背景

①言語の力の育成

「言語活動の充実」の方向性が打ち出されるまでの経緯を見てみたい。

「言語活動の充実」への経緯

○平成 16 年 2 月 文化審議会答申

「これからの時代に求められる国語力について」

「学校教育においては、国語科はもとより、各教科その他の教育活動全体の中で、適切かつ効果的な国語の教育が行われる必要がある。すなわち、国語

キーワード：言語活動の充実、気付き、キー・コンピテンシー

※ 本学人間生活学部児童学科

の教育を学校教育の中核に据えて、全教育課程を編成することが重要であると考えられる」などと指摘した。

○平成 17 年 2 月 中央教育審議会審議要請

「学習指導要領の見直しに当たっての検討課題」14 項目の 1 つが「国語力の育成」。「国語力」は「すべての教科の基本」と位置づけられた。

○平成 17 年 10 月 中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」学習指導要領の見直しと全国的な学力調査の実施が決まる。「国語力はすべての教科の基本となるものであり、その充実を図ることが重要である。」と示された。

○平成 19 年 8 月 言語力育成協力者会議報告

「言語力の育成方策について（報告書案）」「言語力は、知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基盤として、自らの考えを深め、他者とコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な能力」であり、「言語力の育成を図るためには、（中略）学習指導要領の各教科等の見直しの検討に際し、知的活動に関すること、感性・情緒等に関すること、他者とのコミュニケーションに関することに、特に留意すること」などと提言した。

○平成 20 年 1 月 中央教育審議会答申「教育内容に関する主な改善事項」の筆頭に、「言語活動の充実」が挙げられた。

こうして見てくると、「国語力」→「言語力」→「言語活動」と言葉が変化しながら、国語科で担うものというより、「各教科等を貫く重要な改善の視点」と位置づけられていったことが分かる。

実は、平成 16 年 12 月の PISA2003 の調査結果が発表されたことも「言語活動の充実」の方向性を決めた大きな要因だったと考える。PISA2000 では 8 位であった読解力が、PISA2003 では 14 位と、OECD 平均程度まで低下したのである（PISA ショック）。順位が低下したことよりも注目すべきは、かかれたテキストの意味を的確によみとったり、自分の考えをもったり、目的や場面などに応じて適切に表現したりする力に課題が見られたことと、記述式問題に対する未記入の多さである。低学年の教科、生活科で、どんな言語活動が求められているか明らかにしたい。

②自信と人間関係づくりのために

内閣府の「低年齢少年の生活と意識に関する調査報告書」（平成 19 年 2 月）によると、次のようなデータがある。

内閣府調査報告書（平成 19 年 2 月）
データより

-
- 「自分に自信がある」小学生
平成 11 年 56.4%
→平成 19 年 47.4%（9 ポイント↓）
 - 「自分に自信がある」中学生
平成 11 年 41.1%
→平成 19 年 29.0%（12.1 ポイント↓）
 - 「勉強や進学について悩みや心配事がある」中学生
平成 7 年 46.7%
→平成 19 年 61.2%（14.5 ポイント↑）
 - 「友達や仲間のことで悩みや心配事がある」中学生
平成 7 年 8.1%
→平成 19 年 20.0%（11.9 ポイント↑）
-

自分に自信がある子どもが減少していること、勉強や進学に対して悩みや心配事を抱え、人間関係をつくることが不得手であ

る子どもが増加していることが分かる。

自分に自信がもてず、自らの将来や人間関係に不安を抱えている子どもたちの現状を踏まえると、言語活動を充実させることにより、他者、自己等とかかわり対話しながら、自分への自信をもたせる必要があるのではないだろうか。

中央教育審議会答申（以後、平成 20 年答申）では、言語の役割を次のように記述している。

言語の役割（平成 20 年答申）

言語は知的活動（論理や思考）の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり、豊かな心を育む上でも、言語に関する能力を高めていくことが重要である。

自分の思いや考えをうまく伝えられない、他者の思いをうまく受け止められないことから友達とトラブルになる子どもがいる。言語はコミュニケーションや感性・情緒の基盤である。自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙力や表現力を育成することが、人間関係づくりの基本になるのではないだろうか。

(2)「言語活動の充実」のねらい

①思考力・判断力・表現力の育成

「言語活動の充実」のねらいは、思考力・判断力・表現力の育成であると考ええる。

平成 19 年に一部改正された学校教育法に次のような記述がある。

学校教育法第 30 条第 2 項

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、

主体的に学習に取り組む態度を養うことと。
(下線：筆者)

この中で、学力の重要な 3 つの要素が示されている。①基礎的・基本的な知識・技能、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③主体的に学習に取り組む態度、である。これらの中でも、思考力・判断力・表現力が重要であると考ええる。

平成 20 年答申によると、子どもたちが生きる 21 世紀は「知識基盤社会」の時代と言われ、次のような特質があるという。

「知識基盤社会」の特質

- ① 知識には国境がなく、グローバル化が一層進む。
- ② 知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる。
- ③ 知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる。
- ④ 性別や年齢を問わず参画することが促進される。(下線：筆者)

そして、「このような社会において、自己責任を果たし、他者と切磋琢磨しつつ一定の役割を果たすためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見出し、解決するための思考力・判断力・表現力等が必要である。しかも、知識・技能は陳腐化しないよう常に更新する必要がある。生涯にわたって学ぶことが求められており、学校教育はそのための重要な基盤である。」(下線：筆者)とある。

つまり、「知識基盤社会」では、知識・技能は非常に重要なものであるが、「陳腐化しないよう常に更新する必要」があり、「生涯にわたって学ぶこと」が求められる、

すなわち、「学び続けること」が求められていることになる。その原動力になるのが「思考力・判断力・表現力」であると読み取ることができる。

②自立への基礎を養うこと

「自立への基礎を養う」。これは、生活科の究極的な目標である。ここでいう「自立」とは、次の3つの自立を意味している。

「自立」の3つの意味

①学習上の自立

自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる学習活動を自ら進んで行うことができるということであり、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現できる。

②生活上の自立

生活上必要な習慣や技能を身に付けて、身近な人々、社会及び自然と適切にかかわることができるようになり、自らよりよい生活を創り出していくことができる。

③精神的自立

自分のよさや可能性に気づき、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方に夢や希望をもち、前向きに生活していくことができる。

これら3つの自立は、OECDの提唱する「Key Competency」につながるものであると考える。「Key Competency」は次のように示されている。

OECDの提唱する「Key Competency」

①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力

A 言語、シンボル、テキストを相互作用的に用いる

B 知識や情報を活用する能力

C テクノロジーを活用する能力

②多様な社会グループにおける人間関係形成能力

A 他人と円滑に人間関係を構築する能力

B 協調する能力

C 利害の対立を御し、解決する能力

③自律的に行動する能力

A 大局的に行動する能力

B 人生設計や個人の計画を作り実行する能力

C 権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する能力

以上のことから、言語は相互作用的に用いる「道具」であり、よりよい人間関係をつくったり、自律的に行動するために必要なものであると考える。

3. 「言語活動」を生かした授業

(1) 生活科で取り入れたい「言語活動」

生活科の授業に取り入れたい「言語活動」は、多様な言語活動である。「言語」の意味は、PISA型の読解力の定義の中のテキストの意味のように、広くとらえるべきである。

PISA型の読解力は次のように定義されている。

PISA型読解力の定義

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。

この場合の「テキスト」とは、「連続型テキスト」と呼ばれている文章で表されたもの(物語、解説、記録など)だけでなく、「非連続型テキスト」と呼ばれているデータを

視覚的に表現したもの（図，地図，グラフなど）も含まれている。つまり，文章だけでなく，絵や図も言語と考えることができる。

ピアジェは「児童の判断と推理」の中で，子どもの言葉には2種類あり，「一つは，言葉にとまなう，あるいは完全に言葉にとって代わる身振り・運動・表情などからなることばであり，もう一つは，もっぱら言葉からなる言語活動である。」と述べている。このことから，身体による表現活動も言葉であると考えることができる。

自分の考えをかく以前の活動には，かき言葉ではなく話し言葉を使う活動もある。ピアジェは自己中心のことばについて「子どもは，声を出して考えているかのように，自分自身に向かってしゃべっている。かれは，決して誰かに向けてしゃべっているのではない。」と述べている。子どもは何かの活動をしているとき，自分の動作に二，三の発言をつけ加えることがある。このような子どもの活動に伴う話し言葉も言語活動の一つととらえるべきであると考ええる。

以上のように，文字言語や音声言語だけでなく，絵や図，身体的な表現，活動に伴う話し言葉も言語ととらえることができると考える。

実は，平成元年告示の小学校学習指導要領の生活の学年の目標（3）に次のような記述がある。

生活科第1学年及び第2学年の目標

（3）身近な社会や自然を観察したり，動植物を育てたり，遊びや生活に使うものを作ったりなどして活動の楽しさを味わい，それを言葉，絵，動作，劇化などにより表現できるようにする。

（下線：筆者）

23年前に，現代の「言語活動」につな

がる考え方が明文化されていたことに驚きを感じる。また，現行の小学校学習指導要領の生活の学年の目標（4）にも次のような記述がある。

生活科第1学年及び第2学年の目標

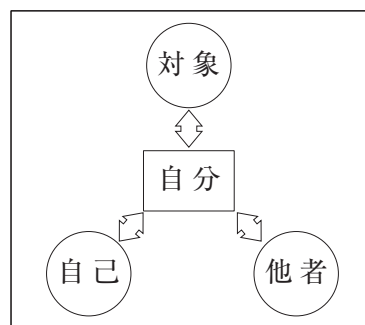
（4）身近な人々，社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに，それらを通して気付いたことや楽しかったことなどについて，言葉，絵，動作，劇化などの方法により表現し，考えることができるようにする。

（下線：筆者）

表現する中身を「気付いたこと」「楽しかったこと」と明示し，「表現し，考える」と思考と表現の一体化の考えが示されている。

（2）「言語活動の充実」のための留意点

生活科で言語活動を充実させるために，3つの対話が大切だと考える。それは，①対象との対話，②他者との対話，③自己との対話，である。



大切にしたい3つの対話

3つの対話を行うためには，3つの活動を充実させる必要があると考える。それは，①体験活動の充実，②交流活動の充実，③表現活動の充実，である。

①体験活動の充実・・・対象との対話

生活科は、その目標の中の記述にもあるとおり、「具体的な活動や体験」を大切にしてきた。

子どもは、具体的な活動や体験を通して、身近な人々、社会及び自然といった対象と対話をする。例えば、見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどして対象に直接働きかけるのである。対象に直接働きかけることは、児童が一方的に対象に働きかけるだけではない。直接働きかけることで、同時に対象が児童に働き返してくるという、双方向性のある活動が行われることになる。対象との対話が生まれるのである。

しかも、対象との対話は一度に限られたわけではない。繰り返し何度もかわる中で、関心をもったり、気付いたり、分かたり、考えたりする。いろいろな対象と直接対話をすることで、実感が伴った言葉を豊かにしていくことになる考える。

ただ、留意したいことが1つある。平成20年の中教審答申で、生活科の課題について、次のような指摘がある。

生活科の課題

・学習活動が体験だけで終わっていることや、活動や体験を通して得られた気付きを質的に高める指導が十分に行われていないこと (下線：筆者)

つまり、活動や体験を重視すると共に、「気付きの質を高める」指導が不可欠であるということである。「気付き」「気付きの質を高める」指導については後述する。

②交流活動の充実・・・他者との対話

小学校学習指導要領解説生活編では、「生活科改訂の要点」の中の「(2) 内容及び内容の取扱いの改善」の②に「伝え合い交流する活動の充実」が挙げられた。

生活科では、「具体的な活動や体験」が重視されているが、その一層の充実を図る観点から、「言葉などを中心としたコミュニケーション活動を通して、体験したことを他者と情報交流することを目ざした『生活や出来事の交流』を新たな内容(8)として位置づけた。」とある。言葉などを使った言語活動は、前述した通り、思考を促し、他者とのコミュニケーションを成立させ、情緒を安定させることにつながる。その中でも、特に、言語活動によって他者と交流して認め合ったり、振り返りとらえ直したりすることが重要であると考ええる。

③表現活動の充実・・・自己との対話

平成20年の中教審答申で、生活科の課題について、次のような指摘がある。

生活科の課題

・表現の出来映えのみを目指す学習活動が行われる傾向があり、表現によって活動や体験を振り返り考えるといった、思考と表現の一体化という低学年の特質を生かした指導が行われていないこと (下線：筆者)

具体的な活動や体験を振り返り、自分なりに整理することが大切だと考える。その際、言葉を使った多様な表現を認めたい。全てを文字言語で表現させようとすることは、子どもに無理強いすることになる。文字言語だけでなく、音声言語、身体表現、絵や造形表現など、多様な表現活動を認めることが大切だと考える。

つまり、表現活動の充実で留意したいことは次の3点に要約できる。

(ア) 出来映えでなく、子どもの表したいものにする

(イ) 多様な表現を認める

(ウ) 思考と表現は一体のものと考え

4. 生活科の「気付き」

生活科の改善の基本方針として、次のように述べられている。

生活科の改善の基本方針

○気付きの質を高め、活動や体験を一層充実するための学習活動を重視する。
また、科学的な見方・考え方の基礎を養う観点から、自然の不思議さや面白さを実感する学習活動を取り入れる。

言語活動を表現活動ととらえるとき、何を表現するのかを明らかにする必要がある。生活科におけるそれは「気付き」であると考ええる。さらに、「気付きの質を高める」ことが期待されている。「気付き」とは何か。

(1) 「気付き」の意味

平成 20 年 8 月告示の小学校学習指導要領解説生活編では、「気付き」を次のように定義している。

「気付き」の定義

- ①対象に対する一人一人の認識
- ②児童の主体的な活動によって生まれるもの
- ③知的な側面だけではなく、情意的な側面も含まれる
- ④次の自発的な活動を誘発するもの

(2) 「気付き」の種類

①何に気付くのか

生活科の学年の目標の中から、何に気付くのかを取り上げたい。目標 (1) には、「地域のよさに気付き」、目標 (2) には、「自然のすばらしさに気付き」、目標 (3) には、「自分のよさや可能性に気付き」とある。

②どう質的に高まるのか

「気付きの質を高める」という言葉があるが、どう質的に高まるのか、整理したい。小学校学習指導要領解説生活編「教科目標の趣旨」によると、(ア) 無自覚なものから自覚された気付きへ、(イ) 一つ一つの気付きから関連付けられた気付きへ、(ウ) 働きかける対象への気付きだけではなく、自分自身の気付きへ、と質的に高まると想定されている。

③「自分自身への気付き」とは

最終的には「自分自身への気付き」が期待されている。具体的には、(ア) 集団における自分の存在に気付くこと、(イ) 自分のよさや得意としていること、また、興味・関心をもっていることなどに気付くこと、(ウ) 自分の心身の成長に気付くこと、である。自分自身への気付きが自信につながり、自立への基礎となると考える。

(3) 「気付き」の質を高める工夫

生活科の気付きの質を高めるために次の4つの指導の工夫が考えられる。

①振り返り表現する機会を設ける

活動や体験したことを言葉などによって振り返ることで、無自覚だった気付きが自分の中で明確になったり、それぞれの気付きを共有し関連付けたりすることが可能になる。言語活動を通して、気付きの質が、無自覚なものから自覚された気付きへと高まるのである。

気付いたことをもとに考えさせ、気付きの質を高めるためには、見付ける、比べる、たとえるなどの多様な学習活動の工夫が求められる。児童は、表現する言語活動を通して、活動や対象を見つめ直したり、既有経験や他の対象と比べたりして気付きの質を高めていく。その中でも、たとえる活動は、それまでの気付きと関連付けられた、

より高い気付きになっている。

②伝え合い交流する場を工夫する

児童は体験したことや調べたことを友達と伝え合う中で、自分が発見したものと友達が発見したことを比べ、似ているところや違うところを見付ける。表現し合う言語活動を通して、一人一人の気付きを質的に高めることになるを考える。

また、低学年の児童には、ピアジェがいうように、「自己中心的」という特徴がある。ピアジェは「自己中心的なことば」という名称で子どもの言葉の特徴を述べた。「このことばは、何よりも子どもが自分自身についてのみ語っているが故に、だが主としては、かれが話し相手の観点に立とうと試みることをしないが故に、自己中心的と呼ばれる。」体験したことや調べたことを友達や異学年の児童、地域の人々に伝える活動を通して、「自己中心的なことば」が「社会化されたことば」となり、相手の反応から伝え方や伝える内容について足りてないところに気付くことがある。また、逆に、伝え方や伝える内容について、身の周りの人々から賞賛されることもある。このような体験が、相手意識や目的意識をもたせるきっかけになり、人間関係づくりの基礎となると考えられる。

③試行錯誤や繰り返す活動を設定する

児童は対象と対話する中で、試行錯誤を繰り返し、条件をいろいろに変えて試してみる中で、対象に対する気付きが質的に高まることもある。繰り返し調べる活動を通して、共通点に気付いたり、相違点に気付き多様性に目を向けたりすることができる。その共通点や相違点についての気付きは認識であり、科学的な見方や考え方の基礎になると考えられる。

④児童の多様性を生かす

児童一人一人には違いや特性があり、児童の学習活動も多様になるので、それぞれの気付きも多様になるはずである。一人一人の児童が気付くことは違っていても、それぞれの違いや共通点を見出す中で、気付きを質的に高めることができる。学級の中では、多様性を尊重する風土を醸成し、互いのよさを認め、互いが異なることを認め合える雰囲気作りをしていくことが大切だと考える。

5. 研究のまとめ

「言語活動」を生かした生活科の授業について考えてきた。

「言語活動」の「言語」の意味は広くとらえる必要があることが分かってきた。文字言語や音声言語だけでなく、絵や図、身体的な表現、活動に伴う話し言葉も言語ととらえることができると考えられる。それは、児童の発達段階からも、OECDの唱える「Key Competency」からも自然な考えである。

生活科では、その教科創設の時から児童の「気付き」を大切にしてきた。身近な人々、社会及び自然といった対象と対話したり、友達などの他者と対話したり、自己と対話したりする中で、気付きの質が高まっていくことが分かった。言語活動を充実させることで、自分の気付きを表現したり、身近な人々と交流したり、自分を静かに振り返ったりすることができる。このことは、生活科の自立への基礎を養うことに留まらず、OECDが提言した「Key Competency」、そして自立した人の育成につながるものである。小学校低学年における生活科の指導がこのような意義をもつ大切な教科であることを肝に銘じて、「言語活動」を生かした一層の授業改善に努めたい。

引用・参考文献

- 文部科学省（2011）「言語活動の充実に関する指導事例集」，教育出版
- 文部科学省（2008）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」中央教育審議会
- 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説生活編」，日本文教出版
- 加藤明・長谷川真理子ほか（2012）「あたらしいせいかつ上」「新しい生活下」，東京書籍
- 原田信之・須本良夫・友田靖雄（2011）「気付きの質を高める生活科指導法」，東洋館出版社
- ヴィゴツキー・柴田義松（訳）（2004）「新訳版 思考と言語」，新読書社
- 高取憲一郎（1994）「ヴィゴツキー・ピアジェと活動理論の展開」，京都・法政出版
- 中野重人（1993）「生活科教育の理論と方法」，東洋館出版社